

中國中學讀本

一の卷

40
810
9925

43353

教科書文庫

3
810
41-1892
200000
67997

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

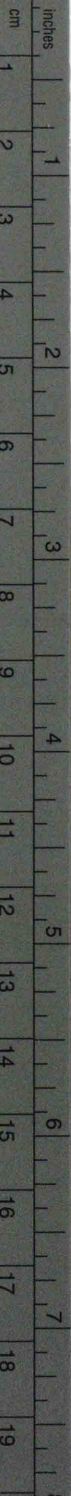


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



42
810
明25

逸見伸三郎編纂

國文
中學讀本

東京

吉川半七藏版



凡例

一此の書のおみかたも、前なる文を、後なる文の基とし、一卷を、環の端なきが如くせむ事を務めたり。其の文も、國文の轉來し概畧を知らせむが爲、作者の古今にかゝはらず、姿と様とよよりて、順序を立てたり。

一讀習の便宜を計りて、第三學年級迄のなるべく文の長を等くせむ事を務めて、一編の文を二つとも三つともなし、尙そを幾段にも分ち或は文の長きに過ぎ、或は事實の今に適はぬも、すべて省捨て、詞の誤れる、格の違へると補ひあらためたり。

一首卷は、いまだ國文漢文といふ辨なき初年級の生徒よ、その觀念を與へむとて、第一學期の料に物しつ。されど初より國文漢文を並べて課せむとする學校の便を謀りて別に國文のみを以て一學期の料に物しこを初卷と題したり。

一一學年を三十二週と豫定し、授業時數ハ初年級の第一學期にて首卷を用ふるハ毎週四時、初卷を用ふるハ毎週二時とし、第二學期より第三學年級迄を毎週二時とし、四年五年に至りては、毎週一時と見積りたり。さて第一第二の學年級にてハ、一時に一枚もしくは

一枚半を、第三學年よりと、一枚半あると二枚許を、授けむ目的もて紙數を定めつ。

一 語格文法の教授方も、目標ある所々につきて、詞の上の格法を説明し、且每冊の終に掲げたる、文法摘要によりて、一學年中に授けたる格法を、會得せしめむとせり。されど、かくせしのみにてと、語格文法をとり總ふる觀念、たしかからトと思はるれど、第二學年より、讀書の傍に教ふべき容易き、文法書を、別に物せむとの心構あり。

一 送假字ハ、官報附録の送假字法により、猶たらぬ所も、故權田直助翁の國文句讀考國文學柱等によりて、訂正しつ。さて又、第一學年級にては、つとめて讀易からしめむ事を望むが故に、漢字の傍へ片假字以て語尾に附辭を書入れたれど、第二學年級よりと、初學の讀易からぬ詞の外ハ、煩きをさけてすべて省きつ。

一 授業のついでも、教師先教ふべき文の主旨、もしくは、作者にかゝる事とをも説きて、生徒の心をひき起し、さて、句讀と音調とを正して、讀方を授け、かくて後、言詞の意義より、一句一段の解釋に及び、終に臨みて、生徒をして、一文章の通義を、説話せしめむ事を要す。

例言

一の卷を教授する間に、生徒をして知らしめむとする語格文法の大畧は、普通の係、結ヒトの法、名詞、動詞、辭イロハの四大別なり。然して、此の卷中に用ひたる格法上の標目は左の如し。

- ◎◎ 係、辭には此の標を附く
- ◎ 結、辭には此の標を附く
- △△ 結、辭を省きたる所には此の標を附く
- 名詞には此の標を附く
- 動詞には此の標を附く

一 辭には此の標を附く
 〇〇 はやく教へたる格法を生徒に問ふべ
 き所には此の標を附く
 一同十標を所々に附けたるは前に教へたる事
 をふたたび三たび生徒に示して、練熟せしめ
 むがためなり。
 一 たゞ、動詞名詞の標をのみ附けたるは、動詞に
 ては活用の種類を問ひ、名詞にては何名詞な
 りやを問はむが爲なり。係、結の標も亦之に同
 じ。

例言

一 生徒に問ふべき標を附たるは、只其の一二
 を示したるまでなれば、教師は文章のうちに
 就き、折々生徒に問ひて、答へしめむことを要
 す。

一 標を附して、格法を知らする順序は、本文のう
 ちに就き、生徒の會得し易からむと思ふを旨
 としたれば、次第の如くならぬもおほかりな
 む。こはたゞかゝる仕方によりて、やう／＼に
 語法文格を教へむとの心構を示したる物な
 れば、教師はなほよき仕方を求めて、さづけむ

第九 阿蘇山六二

橘 春暉

第十 阿蘇山二

橘 春暉

第十一 富士山の噴火

神澤其蝸

第十二 東路の旅

本居宣長

第十三 那智のたき

小澤久足

第十四 松島の嵐

作並清亮

第十五 我が國の美術

佐野常民

第十六 巨勢金岡

繪畫叢誌

第十七 大畫工の刻苦

作者未詳

第十八 本學藝に志す者の訓

三浦安貞

第十九 太田道灌

湯淺元禎

第二十 武藏野の紀行

北條氏康

第二十一 江戸のなりたち

佐野常民

第二十二 江戸士の風俗

太田道灌

第二十三 文の花ざかり

細川潤次郎

第二十四 大成殿上梁私記一

藤原安辰

第二十五 大成殿上梁私記二

藤原安辰

第二十六 ローマ人一

新井君美

第二十七 ローマ人二

新井君美

第二十八 保己一古書を訂す

伴信友

第二十九 君平山陵を求む 龍澤 解

第三十 大和の檜隈の御陵 本居宣長

第三十一 多武峯 本居宣長

第三十二 藤原鎌足大臣 北島親房

第三十三 宇治の平等院 文祿清談

第三十四 渡部競 室直清

第三十五 重盛父を諫む 平家物語

第三十六 重盛父を諫む 平家物語

文國 中學讀本一の巻目次畢

文國 中學讀本一の巻

凡、世間にある人、貴きとなく、賤きとなく、父母の
生まざる人やある。されば父母は、我が身の出来
し本なれば、本をば忘るまどきことなり。況、養育
の恩、山よりも高く、海よりも深し。今孝心に本づ
かむとならば、父母の恩をよく思ふべし。幼稚
の程は、父母ともに晝夜辛苦を云はず、常に抱育

第一 孝順 室直清

て、唯子の息災にして、成長するを待つより外、何の願がある。其の子や、たとふにあれば、師を擇び藝を習はせ、世に立ちまどるを見ては、悪き友にもひかれ、不慮の難にもあはむかこ、目に見えぬ事までも、たえず心苦く思ふ程に、すべて一生の營、何事か子の爲にせぬ事あらむ。何の時か、子を思はぬ事あらむ。是らの厚恩だとへ報つなくさずとも、せめて孝行にして、養ふべき事なり。孝行と云ふは、必しも、父母の衣食を結構にせよと云ふにあらず。分限相應に、父母の飽煖なるや

門下あり
野史の巻目

うにすべし。さて、第一に心得べき事は、何程父母の身を孝養すとも、其の心を安せずしては、大なる不孝と云ふべし。何事も、父母の教訓に違はず、世法を重く、よく身を守り、家を保つべし。其の子のかくの如くなるを見ては、父母の心中、いか程の安堵とか知る。是を父母の志を養ふと言ふなり。たゞ常に思ふべし。惜むべきは、父母存生の日なることを、今此の時、及ぶべき孝養を致さずば、父母死して後、いかに悔ゆともかへるべしや。たと

ひ、山海の珍物を供へて祭るとも、生ける時の蔬
菜にはたどるべし。いかなれば、今の世の人、父母
の養を大切のことに思はざる。烏の鳥すら反哺
とて、親にくゝめ反すといふ事あり。人として不
孝なるは、人たる本心たえはて、禽獸にもたど
りたりといふべし。

第二 鷹山公の孝養 蒞戸善政

天明七年、御實父種美公假初ならぬ腫物に、なや
ませたまへることを聞き給ひ、御側の外科醫を
上らせて、御様子伺はせられけり。難治の御症と

種美ハ秋月長
門守あり

聞かせられしより、常はこれのみ事とし給へる
讀書すら廢せられ、案のもとに黙座ましくして、
御心を痛め給へる御有様、中々拙き筆の形容し
參らすべきにあらず。かゝる様子に渡らせ給ひ
しは、凡、九十日に近かるべし。

御看病として、發駕ましくけるは、八月十七日
にて、道中を急がせ給ひ、二十四日申の半ばかり
に、櫻田の御屋敷に着かせ給べり。御祝の御膳進
めに、御菜の物へ御箸付けられず、御飯さへ一
椀きこめし、御待受の御客へもそこくくに御

會釋あり。ごく御出殿あり。一程に御身近くつと
むる。御刀番すら揃はぬに、直に御駕をいそがせ
給ひければ、半途ならむ頃、漸、御行列は揃ひた
りとなむ。されば、此の日より、御みづから御看病
なし進ぜられ、夜は九つ時下、に御歸殿ましまし、
朝は辰の刻はかりに入らせられ、御泊がけにて、
御看病のことも多くあり。御様子さし重らせら
れしより、御逝去までは、夜ひる續けての御取扱
なりき。着かせ給ひしより、御逝去まで、三十餘日
の間、寢食を安ど給はず。

長門守様、御祈療志るしなく、逝去し給ひければ、
痛悔ませ給ふこと、筆の寫すべきにあらず。朝は
り夜まで、麻の御上下召させられ、黙座まし、
朝夕御膳供へ給ふと、御拜禮なし給ふとの外は、
座し給へる御疊の外へ移り給はず。されば、御看
病中の御疲より、喪の御慎のかかりしかば、世の
ならはしに、精進あげと云ふ事あり。是からは魚
もきこしめせ、御勤も弛べ給へと、大殿重定より御
看れくらせられたるは、有りがたき御慈悲とぞ
聞えし。されば、かく御慈愛の淺からぬに、何かは

たまらせ給ふべきむせび泣かせ給ひ其の御肴もて御膳も常よりはすぐしてきこしめし御忌日過ぎて御上下は脱がせ給ひけれど餘の御慎は始終もあらせられざりきとぞ。

第三 米澤の殖産 興業意見

産を殖し業を興すは國家繁榮の源にして誰しも願く思へどこれを全成就せしめむことはいといと難かるべき業にこそ。山形縣置賜郡は人民の風俗うるはしく家業をつとめて怠らず物ごと質素にして儉約を守り家居を構ふるに庭

園を設くるもの極めて少く人々理財の術に長け村々富有にして貧き家稀なりけり。此の邊の畑には主として桑樹を仕立て其の中間に菽麥蔬菜など植ゑたり。士族の屋敷廻にも見渡す限桑を栽ゑて蠶飼の料とぞすなる。郡内専蠶絲の業をいそしみ絲織精好織數寄屋織半襟地絲類羽織の緒三味線の絲に至る迄良品を製出し多く他國へ輸すとなむ。さて是等の品物ども多くは士族の手より産ずる所なりとぞ。そもく此の地方のかくも蠶業の盛大を極め

人々豊に、村々賑へる濫觴を尋ぬるに、安永の頃、藩主、上杉治憲の代に當り、積年疲弊の後を承け、封内いたくあれ増りて、財政の困難、いかにもなすべからざるに至れりしを、治憲、深くいたみ憂ひ、誓ひてこれを救はむと思ひたこし、竹股當、鋼、葎戸善政等を、重く任用し、専力を殖産、工業の事に竭し、衣服をあらくし、飲食を麁にし、身みづから、節儉を守り、士民に先立ちて勤勞し、民力を愛養するを以て、財政を救ふ唯一の術法とは志たりけり。治憲、かく勤勞すること幾十年、民に

賦をだに加へず、營々としていそしまれしは、士民も能く領主の心を受け、國中、和同一致して勤儉を守り、遂にその目的を遂げ、茲に初めて富強の基を開きたりとぞ。今日に至るまで、永く富源の枯れざるは、全、治憲の賜なりといふ。

第四 砂糖の由來 製糖沿革誌

砂糖は、はやく支那より、我が國へ渡りたるものなり。其の古は、甘き味を調ふるに、千歳藟アマヅラの煎汁を用ひ、又は干柿の粉なども用ひたりとぞ。室町の末の世に至りて、外國へ往來すること開け

しより、砂糖漸にたほく渡りこしかど、珍き物ゆ
ゑ、其の價もたかくなみくの人には、用ふべくも
あらざりき。慶長元和の頃、沖繩の島人、其の苗を
支那より傳へ、始めて沖繩にて、砂糖を製り、元祿
の頃には、薩摩國へも移、植ゑて、其の製造をこ
ろみたりとかや。
徳川氏政をとりて、世の中穩になりしより、奢の
風やうく盛になり、飲食のさまも古と異り、砂
糖の需用いたく開けしかど、國內には、いまだ砂
糖を作出づる土地なく、年々支那の商人の持、渡

るをのみ用ひたり。爰に宮崎安貞といふ人あり。
國の爲に、是を深く憂ひ、此の物、暖國の海邊には、
必、成長すべし。よく其の術を盡して、多く作出さ
ば、みだりに國の財を外國へ出さぬ、一つの助と
もなりなま。力を盡して、これを製、弘めむ人は、永
く、我が國の富を致す人ならむとさへ云ひつけ
り。然るに、此の時より、二十年ばかり過ぎて、安貞
の志を續ぐ人こそ出來にけれ。そは徳川の八代
將軍、吉宗公なりき。
吉宗公、享保十一年の頃、長崎に居たりし、清國の

船頭李大衡に命せて、製糖の法を委しく書記さし
め、其の次の年、薩摩の落合孫右衛門をめぐりて、甘
蔗の苗を、沖繩より取寄せしめ、吹上ならびに、濱
御殿の空地に植ゑ、さまざま製試みて、始めて十
四貫五百目の黒砂糖を得られたり。かくて、此の
物暖なる地にこそよく育ためとて、紀伊國にも、
苗を分ち給へりとぞ。
將軍のかく心を盡し給ひしより、國々にも、甘蔗
植うるごと、漸行はれしが、いまだ、製糖の術くは
しからで、利益もなかりしかば、さたう作るなら

薦からつくれと云ふは、やり歌さへ行はれたり
となり。さるを、田村元雄、平賀源内、永富獨嘯菴兄
弟など、つぎつぎ世に出で、心力をこの業に盡
し、遂に外國の産にも、立ちまさる品を製出た
り。此の人々の國を思ひて、この業をなす遂げた
るは、世にいさをいきためなりかし。

第五 平賀鳩溪 作者未詳

平賀源内は、又の名を鳩溪と稱ふ。讃岐の國人な
りき。其の才餘ありて、徳足らざりしにや。終を善
くせざりしかど、世に傳ふべきこと多き人なり。

源内幼き時より、人にすぐれしを以て、天狗小僧
と呼ばれ、秀才を以て、人にもてはやされたりと
ぞ。はやく藥園の賤き役人となりしかど、功名を
願ふ志、切なりしまゝ、仕をやめて長崎へ行き、唐
人館に出入し、阿蘭陀の譯官につきて、阿蘭陀の
語を學びて、才器ますく、進みければ、阿蘭陀の
人さへ、其の常ならぬに驚きたりとなむ。
此の頃、國々にて製出でし砂糖は、甘うすく、いろ
さへ白からざりしに、源内、大坂の町人、中島屋喜
四郎にすゝめて、甘蔗を備後國に植ゑさせ、製方

を考へて、めづらしき白砂糖を製出でたり。其の
のち江戸へ出で、田村元雄につきて、本草學を修
め、巧に種々の器を作り、いたく世にもてはやさ
れたり。源内の學才をきゑて、扶持せむとせし大
名もありしが、才あるにまかせて、人に下ること
を心よ小とせざりければ、固く辭みて仕へざり
き。
明和年間、又長崎に往きて、阿蘭陀の人と交り、一
日、彼の國の發電器を見て、其の様を模造らむと
思ひ、五日六日の間、臥處に籠りて考居りしに、遽

に工にあつらへ、彼の器とかはらぬ機を、作出で
たりしかば、其の奇巧に驚かぬものあらざりき。
源内、江戸に還りし後、石綿もて、火浣布つくるこ
とを工夫して、時の將軍家に進りしに、人皆そを
怪むのみにて、源内を用ふるものなかりけり。源
内ふかく身の幸なきことを憤り、天竺浪人、風來
山人など稱へて、淨瑠璃本、戲作書をものせしに、
文の力も筆の運も世に類なきを以て、いたく世
の中に行はれたりとぞ。

第六 長崎 長久保玄珠

長崎は、肥前國、彼杵郡にて、福富浦とも、瓊浦とも
いふ。昔内大臣、平重盛の孫、某と云ふ者、鎌倉の北
條家に仕へて、家宰となり、伊豆國、長崎を領地と
し、長崎氏と稱ふ。元弘の亂に、勘解由左衛門為基、
西海に流落し、此の地に居たり。子孫其の地の領
主となり、氏を以て地の名とす。為基より八世、長
崎甚右衛門、領主なりしを、天正年間、豊太閤九州
征伐の時、没收せられ、後に公領となる。元龜二年
までは、唯六町なりしが、次第に繁昌して、元祿の
頃より町數八十町、家數一万千六拾五町、年寄八

人有り。長崎奉行二人、立山の官舎に在り。阿蘭陀の屋敷は、出島とて内海へ築出し、四方の石垣甚、嚴密なり。石橋一つにて出入す。門の側に番所有り。入口に旌柱あり。舍々に二階あり。二階の窓より、阿蘭陀人ども、さし覗くをみれば、目光り、眉毛赤さび、人相はなはだ恠し。同行の人、皆厨下より入りて、階を登る時、紅毛人も出迎へて嚮導す。其の顔色甚、白し。頭髮をそりて、黒髪の假髻カッラを被る。衣服は、此の方の股引の如く、手足をくるみ、釦にて志め、上衣も袖なく、前は釦にて合せ、腰

下、分開きて、此の方の輕業装束に似たり。紅毛人等、種々の乾菓子を持ち出し、茶をすむ。又葡萄酒、アム酒など、をすむ。暫ありて、階を下り、又花園の上なる樓に登る。座敷の中央に、床のやうにて、足高きものあり。横六尺、長さ壹丈ばかり、羅紗にてつみ、四方の隅に穴あり。通事の人に問へば、紅毛人の丸を弄するところなりといふ。

第七、あらぬ火、橘、春暉

筑紫の海に出づるあらぬ火、見るは、肥前の宇土、

第一段のか、り結び

十一

八代の浦々よ。殊によく見ゆるは、天草なりと云ふにぞ。さらば天草に渡るべきと、小き獵船をかりて渡る。此の日天氣のごやかなれば、四方の詠よ。船頭、銚と云ふ物を以て、魚を取れり。銚の形、鎗の如く、さきは鐵にて、三つにわれ、かへりあり。石づきに、長き繩を付けたり。浮べる魚は、小きものといへども、これを突くこと、鳥さしの鳥をさすが如し。大なる魚の、船に遠きは、銚を投ぐるに、矢を射るよりも、捷なり。

今日も銚を持ちて、船端にたち居りしが、波間に

第一段の保辭
重りたる例

黒く見ゆる物あるを、件の銚投げしに、其の魚躍りてのがれゆく。船頭、志たり顔に、綱をたけ長く、泳るし、志はらくして、靜に引きよせたるに、其の魚、かへりにとぢられて、船近く寄來ぬ。船頭、銚の柄を取りあぐるまゝに、船にはね上げたれば、長さ八九尺あまり、形細くして、口吻恐し。早魚と云ふものなりとぞ。口ばしの長さ、二尺六七寸もありぬらむ。末鋭く、膚鮫の如く、魚に有るべきものと見えぬ。

さて、はからざる得物に、心なくさみて、はや天草

に近付きけり。三角と云ふ所より、山の間に船さ
し入れてゆく。水清く山峙ち、緑につゞく小松の
間に、わら屋の軒いと静なり。何人の住むにかと
ゆかしくも見ゆ。右の方は、波うち際ひろし。いざ
や志ばしと、船さし付けて、碇たゐるす。濱邊に小き
蛸多しと云ふに、潮は浅く、砂は清し、わたりて蛸見
あるく。船頭は、例の鉾かたげつゝ、行きしが、二尺
に近き、鱸一つ突得てかへれり。鮮くして、味の美
なること云ふべくもあらず。船さし出して急ぐ
に、暮近き頃、惣象と云ふ所に至る。

第八 知らぬ火 橋 春暉

有形名詞

村にあがりて、知らぬ火見る所の案内を頼みし
に百姓、心よううけがひて、けがれぬ筵携へ、先に
立ちて、東の海の岸に、さし出でたる山にのぼる。
此のあたりにての高山なるが、此の峯よるしと、
筵しきて座す。向に肥後國ありて、海上のわたり
五六里より、七八里にすぎず。南北は、入海にして、
其の限見えす。案内の人指さして、右なるは鼠島
なり。左は大島なりと、數々をしふ。げに海上三里
ばかりに、いと小く島々見ゆ。志らぬ火は、いづれ

轉用名詞

無形名詞

合
成
名
詞

に出づるかど問ふに、鳥々見ゆるあたりと云ふ。初は、人里も遠く、いと物凄き島山なりしが、追々見物の人々出來りて、數十人に及ぶ。程なく海の面や、夕烟引渡して、人顔もさだかならず。今年は、例より残暑も強けれど、空は心よく晴れ、風にもむろに吹きて、いと涼ければ、夜もふくるも知らず。夜半にもなりしかど、知らぬ火のさたなし。今宵は、いかなることぞ。知らぬ火は、出でざるかと、怪居たりしが、八つ近き頃、遙に波をはなれて、赤き色の火、一つ見ゆ。志ばらくして、

無
形
名
詞

其の火、左右に分れて、三つになるやうに見えしが、それより追々に出づる程に海上わたり、四五里ばかりの間に、百千の数を志らず、明なるあり。幽なるあり、滅ゆるあり。燃ゆるあり。高きあり。低きあり。誠に見事にして、目を驚かせり。火の色、皆赤くして、提燈の火を遠く望むが如し。人に問ふに、年によりて、多きことも、少きことも定らずとぞ。今年はずぐれて多く出でたるも、予が幸といふべし。今宵、まのあたり見しかど、いかなる火と云ふことを知るべからず。昔の人の志

らぬ火と名付けしも、もつとももの事と云ふべし。さて、夜あくるまで、かくの如くにして、あさ日出づれば、火の光、やう／＼に薄くなりゆきて、星とともに消滅す。昔、火の國と名付けられしも、故あることなり。中世、火の字をいみて、肥と改められたりとぞ。

第九の阿蘇山一宿の事
橘高春暉

今よひは、阿蘇の大官司のもとに一宿して、あそこそは、峯にのぼらめと、心ざしに、晝過ぐる比より、風のいろ少あしくみゆれば、あすになりて

第三段のか、
り結び

第二段のか、
り結び

雨ふり、登山の縁をうしなはむこともやと、杖もひめぐらすにぞ。心あわたづしう成、來にたる。今よりと思へど、道なし。すぐさむもほいなければ、北の麓の、的石といふ里に入り、あないの人を頼みて、山の北にたもてより登る。木こりのみ行きかへば、道いと細くけはし。絶頂に至、付けは、日既にくれはてぬ。晝、參詣多き時に、商ふためと、旅人などの、行きくれたるが、宿る爲とに、茅屋あり。只むしるもてかこひたるばかりにて、床ごてもなし。此の内に入りて宿る。

名高き峰に登りつめて、空もいと近う星探るべき程なるに、夜あらしの吹きわたる音も物すごくて、一山人倫絶え、四方寂寥たるに、夜ふくるまで、目もあはず。又、もゆるあたりも、程遠からで、地震ひ、山動く、世にある心地にはあらず。夜あけぬれば、きのふたもひしには、ごとなりて、山かつら引渡せる間に、朝日の影いと花やかなり。夜半のわびしさに、ひきかへて、心いさめり、とくたき出で、もゆる所にいたる、大なる穴あり。是をこかどといふ。中のみかど、北のみかど、法

性崎と名づく。都合三ヶ所なり。當時、さかりにもゆるは、法性崎なり。たとへば、ふいこの口のごとく。黒煙天を覆ひ、時々火出で、其の音のわびただしきこと、今にも此の山、微塵に碎けむ心地す。其の勢は、筆に書きつくすべくもあらず。志は、見居たれど、我が身も、山ごとともに、くだけさるべき心地して、あくまでも見つくしがたし。
第十 阿蘇山ニ
橘山春暉
少くたれば、大なる堂あり。内に額あり。壽安鎮國山と書けり。堂は傾きたり。人はもとより住むべ

き所にあらず。むかいは、是より下つかたに、寺院
多くありたりといふ。すべて絶頂は、海濱のごと
くにして、硫黄の氣にて白く見え、石は皆金くそ
の如くにして、土沙あることなし。志は下れば、
土見え草ありて、はじめて、世界の景色あり。西の
方には、はるかに雲仙がたけあり。北の方に、豊前の
彦山を望む。其の外の眺望は、四方の山にへだて
られたり。
此の阿蘇山は、目八分の山、四方をかこみて、堤を
築きたるごとく、連りめぐれり。其の真中に此の

動詞

阿蘇山のみ、基を別にして、一峰秀でたり。奇妙の
地形なり。此の山の四方のふもとを、阿蘇谷とい
ふ。幅二三里ほどづゝにして、平田あり。只西の方
のみ、少ばかり、四方より打圍みたる、堤の如き山
きれて、川流出でたり。傳へ云ふ上古の世は、此の
地、湖にて、阿蘇山は、湖の中の島なり。阿蘇の
明神むかひ、此の國の守なり。時、西の方の山を
切通して、水を落し、湖を干して、田地となせりと
誠は、此の地の様子をつらく見るに、湖なり。こ
こと、虚説にはあらトと覺ゆ。又、人智の古今なき

ことを感ず。それより山を下りふもとの本社ふしをがみぬ。神主は、詩歌のすき人ときけば、音づるにいなみもせずいと親くもてなりぬれば、ひと日ふた日留る。其の家の事尋ねりに神孫たどく。天正の頃までは、三十五万石を領せしが、豊後の大友氏の爲に、零落せりとぞ。今にては、其のれもかけもあらず。然れども、位は貴し。二位まですめめる例なり。ふるき家なれば、色々めづらしき事も多かり。

第十一 富士山の噴火 神澤 其 堀

寶永四年十一月廿日頃より、江戸中寒氣甚く、一天かき曇りて、朦朧たりしに、同廿三日、午の刻時分、いつくともなく震動し、雷鳴頻にて、西より南へ、墨を塗りたる如き、黒雲變き、其の間より夕陽移りて、物すさまじく、晝八つ時より、鼠色なる灰を降らしぬ。諸人魂を消して、惑ひしに、老人の申しけるは、此の三十八九年以前、かやりの事ありたり。是は定めて、信濃の浅間の焼出でしならむと云ひしかば、諸人すこし心を取直しぬ。

夜に入るに隨ひて、灰彌、強く降り志きり、後には
黒き砂、大夕立の如く降、來て、終夜震動し、戸障子
なども響裂け、物の相色も見えわかねば、晝夜を
分かつたず。家々に燈をともし、往來の人も絶、果て
ぬ。適、通行する人は、此の砂に觸れて、目くるめき、
怪我などせしも有りとかや。諸人、如何なるゆゑ
とも知らず。されば、世の滅ぶるにやと、女童など
は啼きさけびしに、翌日に及び、富士山焼け候ふ
よし注進有りき。

昨廿二日、晝八つ時より、今廿三日迄の間、地震、

有形名詞

御間も無之、卅度程ゆり、民家夥くつぶれ申し候
來、扱廿三日、晝四つ時より、富士山夥く鳴りいて、
富士郡一面に響渡り、男女絶入りし者多く候
へども、死人は無御座候。然る處、山上より煙影
く渦卷、出て、山大地共に鳴渡り、富士郡中一面
に、煙卷き候故、いか様の譯とも不相知、人々十
西方を失ひ罷在候。ひるのうち、煙ばかり相見
え候處、夜に入り候へば、一遍に火焰に相成り
候。以後、いか様に成り候哉、不奉存。先右焼出の
節、不取敢、御注進の爲、罷越し候故、委細の儀は

文
口
言
卷

跡より追々可申上由、彌、火氣熾になり、砂石礫を吹飛し、近
右注進の後、彌、火氣熾になり、砂石礫を吹飛し、近
國廿里四方へ、沙石を降らせ、中にも、伊豆、相模、駿
河は、所に寄りて、二丈餘も降積り、堂社、民屋も埋
れ、田畑の荒あけてかぞへかたし、日を経て稍焼、
鎮りぬ。其の土砂を吹出、所穴となり、其の穴
の口に、大なる山を生ず、世俗呼びて、寶永山と號
す。街道の方より眺むれば、右の半腹に、彼の山出
來て、瘤の如し。さばかり無雙の名山に、此の時、少
瑕のいで來しこそ、恨なれ。

第十一 東路の旅 居宜長

本文ハ伊勢物
語の文詞を是
彼取りいで、
一編を成せり

これかれ伴ひて、伊勢國某の里を曉に立出で、鳥
かなく東の旅に赴きけり。頃は、霜月の十日餘の
事になむ有りければ、旅衣の袖ふく嵐も、甚く身
に志みて、物心細きに、山の梢、道のべの草葉も、冬
枯渡れる氣色、いと哀に眺めやられ、海岸に寄返
る浪さへ、我もいつかはと、げ小羨ぐ覺えつゝ、玉
篠の野邊の假寝も、一よ二よと重れば、故郷もや
うやう遙になるみの浦を過ぎて、參河國にもな
りぬ。八橋も程近しとは聞けど、杜若の花の折に

東下の條ハ
橋の邊までか

國
中
學
讀
本
一
の
巻
二十

きつぞたのこ
とあり

あらざれば、すさまじく思隔て、過ぎぬ。
はや、遠江國なりといふを聞きて、一人の詠める
故郷は遠江トホツノミと聞くからに、ふとの高根や近
くなるらむたれもく、此の東路はまだ始めて
の旅になむ有りければ、富士見む事をなむ、いつ
かと心にかけて、旅の物悲さもうちまきる、
やうなるに、此の頃の空、雪げにのみ搔曇りつゝ、
いと心もとなくて、過行く程に、小夜、中山も、晝の
程に越過ぎて、音に聞來く大井川も、心安く渡りぬ。
此の川は、遠江と駿河國の界に流れて、いと大なる

同條の歌よす
ろがあるうつ
の山べのうつ
つよも夢よも
人よあはぬあ
りけり

る川なりけり。けふは、さりともふと見えなむと
思ふに、猶あやにくよ晴れやらぬ空いといふせ
くて、日も暮れぬれば、宇津山近き里に宿りぬ。つ
とめて、一人が云ふやうよべの夢に、故郷はさし
れかれて、先見まくほしきかの山をなむ見つる
と云へば、今一人が云ひけらく、夢に富士を見る
は、上なき事となむ云ふなるを、某等がために、
駿河なるうつの山べのうつゝにも夢よも
ふとは見えぬなりけり」となむよめりける。
ゆきく、て、清見關に駒を止めて、三穗の松原打

國中
學
讀本
の巻
三十一

眺めやりつゝ、暫やすらふ程に、名にたつ富士の
嶺、嵐にや。雪打散りて、風いと烈く吹來るほど、今
ぞやうく晴間見えそめて、はるけき雲の中空
に、怪き物なむ現れたる。たゞ綿などを積上げた
らやうして、眞白にいと高く見ゆ。人々あきれて、
かれはなにぞと、仰ぎ見やりて、志ばしはをれど
も思分れず。やうく形の見えゆくにぞ、かの夢
にも見ざりし山なりけりとは、知りにつける。
第十三の那智のたき小津久足
井關村といふを過ぎ、市野々村といふに至れば、

向の山に、一筋高く、白き物の見ゆるあり。こは、兼
ねてたもひい、龍の見初めたるにて、うれしき限
なり。こよりて一のじり居も見えて、すべて山
のたゞずまひも、よの常ならずたもしるすこ
しゆけば、その龍はたちまちかくれぬ。此の村の
内、下馬といふところに至りて、茶屋に休ふ。こ
はすなはち、一の鳥居にて、下馬禁殺生の石の標
あり。鳥居を入れれば、橋あり。橋のもとには、下の
丁石あり。老杉は、道をさしはさみ、敷石は苔むし
て、坂物くらく、一丁ごとに石標あり。四丁目に登

れば、彼の瀧いと近く左の方にみえて、俄に大く
なり、目もたごろかれぬ。下りて、五丁目の石標をすぎ、やゆきて二王門あり。門
を入りて六丁目の石標あり。こゝに二筋道あり。
左の方を御幸道といふ。苔ふかくして物さびた
り。かくて、十二丁ゆき盡して、瀧のもとに下る。瀧
見堂あり。その堂に入りてのぞむ。誠にそのさま
は、心も言葉も、たよばれず。譬へむものなく、たゞ
肝をひやして、あきたる口を塞きもあへず、暫見
居れば、小雨の如く、あぶきかよりて、目くるめき、

無形名詞

山も動くやうに見ゆ。丈の高き、幅の廣きことな
どいは、中々たろかになりぬべし。音の烈きこ
どは、五六丁まへより、足もとに響きたれば、あた
りに來りては、いふも更なり。
あたりの山、木ぶかく、老杉のうち、新緑の見ゆ
るさまなど、いひくらず。新緑の時節は、山のさま
は、もとよりにて、水も常よりたほきよなり。瀧
のたつるあたりは、絶壁なれば、木ぶかからねど、
石面にあやくたひたる、木立のさまは、一くさ
の風情あり。是にくらぶれば、早く見し布引、養老

などは、覓にも劣れりといふべし。瀧の落ちいる
邊はみえず。下に大なる崑ども、數かぎりなく、積
上げたらむやうなるが、常の瀧のさまにかはり
て、又一つの壯觀なり。世の諺に、山は富士、瀧は那
智、花は芳野といへる。うべなることにて、此の三
勝は、諸越にもなかるべしと、貝原翁は、扶桑記勝
に志るされたり。此の三勝のうち、二つは、吾度々
契ありしかど、この瀧は、しも未志らざりしを、こ
たび本意とげたるは、いとうれし。音の勝も
山第十四の松島景の瀧の勝も清亮

松島は、巖島、天橋立と相並びて、三景と稱す。中に
も、天然の奇絶、四時に隨ひ、朝夕にかはりて、極る
ことなく、區域廣大にして、日をふれとも飽かざ
るは、誠に松島を無雙とす。松島といふは、總名に
て、其の内に數多の勝地あり。世に八百八島あり
など云ふは、大小の島々、數多きを云ふなるべし。
松島村に屬きて、名ある島三十五あり。其の餘他
村に屬きて、松島の海面にある島々、碁局に石を
並べたるが如く、いづれも争ひて、奇狀を呈す。中
にも名高きは、雄島なり。島々何も天造の自然に

出で、前後のながめ、さま／＼の形をなす、棹をす
すめ、舵をめぐらすに随ひて、千態萬狀かぞへ盡
しがたければ、里人といへども、あまねく其の石
を知らざるもありとなり。されば、見ゆる姿を以
て云はば、八百八島と云ふもたろかなり。
東海は、何の處も、日和よく風静なる時だに浪あ
らきを、松島は數十の島さへ、へたる故、海面平に
して鏡の如く、鳥々には松樹多し。根を巖によせ、
枝も幹も、海風に撓められて、屈曲偃蹇したる状
卧すが如く、倒るゝが如し。大小の鳥々、皆斷岸と

なり、或は樹根をあらはし、或は奇石を出す。其の
狀、筆の及ぶべきにあらず。鳧鷗は、人になれて驚
かず。大魚は、岸に近づきて躍る。その風景の美き
こと、晝夜旦夕をへだてず。殊に見事なるは、雪の
旦なりといふ。福浦島と云ふに竹多し。插花筒に
作り、好事の人茶杓に作る。又一種の竹あり。中の
空ウツクなくして木の如し。刀の眼釘とし、其の枝をも
て箸をも作る。松を名よ負ふ島々の中に、節上げ
き竹の緑の榮ゆるは、殊にめでたし。

第十五 我が國の美術 佐野常民

御國はあつさ寒さ程よく山の姿水のけはひさへ、比なく美きにあえて、人の情もやさしくみやびやかなり。さるが上に、世々明き清き真心もち祖々の血すぢを承けえつる子孫なれば、木のづから、武き直き性ぞ、備れりける。されば、美術といはるゝ、あまたのわざも木のづから外國々とは、さまかはりて、あかれる御代より、歌舞となり、繪畫となり、或は陶器となり、漆器となりて、紀元の前より、これを職として、仕へたてまつれる、氏人さへ定りしさま、古史になむ見ゆる。このくさ

ぐさのわざよ、萬世一系なる、我が大君の御惠の露にうるほひ、御稜威の光よ照されつゝ、我が御國の美術となりて、世々におほひをこそ深められたれ。さて、畫がく業、土にて物つくる事など、韓ならびよ唐土より、その方を傳へし後、古のさま、やうやうに改りゆきたれど、異なる性情を備へし、御國人なれば、外國のさまを摸しつゝ、も、本つ國の物よりすぐれて、木のづから言知らぬ趣をぞ、なしたりける。その外、手かく風、物刻む業なども、御國人

の手にて成、整ひて、木のづから彼の國々と異なる、一
種の品高きさまにぞ進みたる。
又ぬり物のわざは、平城宮より、平安の都の初の
頃には、漆部といふ司さへ置かれ、金をはめこみ
て塗れる抹金鏤、平文など言ひし器、今も御物の
うちにありと、うけたまはれば、そのかみ、此の業
の進みしことぞ、推測られぬべき。武家の政まを
す世となりて後、鎌倉、室町の頃にも、名高き工あ
りしが、江戸の時めきし世よりぞ、其のわざ一際
進みにけむ。名を得たる人々、つぎつぎに出來に

けり。此の人々の製れる塗物の光は、きら／＼と
く、外國人の目にさへかゞやきたりき。
今かゝる事どもを考渡すも、御國人には、木の
づから御國の性情の備ることぞ知られたる。あ
はれ、御國の美術のいよゝます／＼進行くは、や
がて、御國の光彩にあらば、美き山水にあえ、武
く直き性情を備へし御國人よ、いかでこの任に
當らざらむや。いかで其の美を美とせざらむや。

第十六 巨勢金岡

繪畫叢誌

諸越にて、能書の人と云へば、まづ義子、獻子をか

ぞふると同く、皇國の繪師と云へば、金岡をぞろの始、よたくめる。これより上つ世にも、さるべき繪師多かりつらむが、其の傳の精からぬと、只一世にとゞまりて、業を世々にせし人のなかりくとによりて、その聞たかゝらぬなるべし。金岡の譽高きは、其の伎倆の妙なりしが上に、其の子相見、公望、公忠、いづれも世に知られ、公望の子も孫も、又つゞきて、此の道にゆるされたる、上手なりしかば、かくは、後の世に、其の名の遺れるならむ。金岡は、清和天皇より、五朝に仕うまつれりとた

ぼし。齡も没年も、さだかならねど、老後雜髮して、仁和寺に住めるを、醍醐帝めし出したまひて、賢聖の障子かゝせられし時、假髪をつけて、紫宸殿に、此の繪仕うまつりきともあれば、齡高きまで、長らへしことは、うたがひなし。さて、其の事蹟の傳れる所を記さむに、陽成帝の元慶四年に、釋奠を行はれし時、先聖、先師の像をかきて進り、宇多帝の仁和四年、弘仁より後の世に、名高き學者、詩人をえり出して、清涼殿の東西の障子に、其の像かゝせられし時も仕う奉り、又紫宸殿の賢聖

障子はじめて建てられしをりも、像は金岡が仕
う奉り、贊辭は、小野道風記されたりとあり。
又朝餉の間の前に、馬形の障子といふを建てら
れしも、金岡の仕う奉れる所なりしに、この馬よ
なよな腕出て、菘の戸の菘を食みしを、勅ありて、
繋ぎたる體に、改め、描かしめたるより、後、此の事
やみたりといひ、宇多法皇の仁和寺の壁に、か
しめられしは、其の邊の田の稻を食ひあらし、馬
の脚泥に塗れたりといふ。是等の傳は、奇異にす
ぎて、信トがたけれど、歷世稱へてやまざる故に

下二段の活用
詞

結詞を含めた
る格

や。金岡は馬を描くに、妙なりと傳ふるなるべし。
されど、金岡の畫の神に入り、妙を窮めしことは、
馬を描くにのみ限るべしや。山を描くに、十五層
にたゞみなりて、よく遠近を分ちたるに、孫弘高
は、わづかに五層より書分ちえざりきといへば、
山水にも妙なりしこと、又推して知られたり。
第十七 畫工の刻苦 作者不詳
應舉の雞、祖仙の猿と云へば、世にいみしきも
のとゆるされて、金もても購ひがたきはかり、貴
くなりつるは、二人の人のいたく心をこめ、力を

文
中
學
論
の
巻

盡し功にこそありけれ。
丸山應舉、生けるものゝ状を描くことに志したれど、限なきあまたの物をよく描かむことはあたはずと思定め、專雞かくことにのみ心を苦め、一年ばかりの間、日ごとに祇園社へ行き、日すがら目がれもせず、群居る雞のさまをのみ見居たりければ、世には志れものもあるものかなと、袖ひきて笑ふ人も多かりきとぞ。或時、應舉深く思ひえし事やありけむ。衝立に向ひて、筆とりし小繪にかきたる物とは、見えぬばかり、よく出来し

かば、こを祇園社に進りて、いかなる評をなす人かあると、日々に見る人のけはひをぞうかひける。
或日の事なりき。いと賤げなる翁あり。暫衝立しうち向ひてありしが、草をかき添へぬこそめでたけれと、獨ぢちければ、應舉は、翁に従ひて、そのふせ家へ参向ひ、懇に故由を問ひし。翁はほゑみつ、云へらく、己は菜を賣りありく、賤の男ふて、繪のことなどは、つゆも知り侍らず。されど、年ごろ雞をかひつるふよりて、羽色の時ふより

國
中
學
論
の
巻
三十一

て、變ることをぞ。知り侍る。衝立、小物せられし雞
の羽は、冬の色にて候へば、よくも心えて、草をか
きをへ給はざりきと、思ひ侍るまでなりと答へ
ぬ。應舉は、翁の言を聞きてより、羽色のことに、一
きは心を用ひたりとぞ。
森祖仙も、又一種の生ける物を巧に描かむと志
し、獵人小あつらへて、猿を購來りて、庭なる木の
本小繋ぎたき、朝夕こをうつすわざにのみ、身を
委ねつ。かくて、年月へし後、もはや、世に見すとも、
はづかしくからどとゆるしてかきたる畫を、或人

小見せしに、こは家に畜ひたる猿の狀小こぞと、
むげ小見たとして、評しければ、祖仙は、にはかに
たもひ立ち、人の往來だ小なき、み山の奥よりうち
籠りて、ひたすら山猿のふるまひ、心をつけつ
つ、三年ばかり經て、世小出てしよ、そのかきたる
畫の妙なりしこと、實に及ぶ物なかりきとなむ。
第十八 學藝小志す者の訓 三浦安貞
今の人、或は學小こゝろざし、あるひは藝に志す
もの、一旦、憤を起し、晝夜をわかたず、つとめはげ
むといへども、已小一月を經、半月をすぎ、怠る心

第二段の
か、
り結ひ

はやく生ず、吾がつとめの至らざるとはいはで、
生質の過に委す。馬は疾しといへども、朝暫走り
て止まむふ、いかでか、牛の終日ありかむふ及ぶ
べき。谷間の石の磨け、井榦のまるくなるも、豈一
朝一夕の力ならむや。今日やまず。明日やまず。今
年やまず。明年やまず。然して後その志るあり。
人一生の力を、その道小用ふるだ小、尚その奥義
小いたるはやすからず。況我一月半月、乃至一年、
半年のつとめを以て、他人一生の功小比せむと
するは、思はざる事甚きなり。

むかし、李白書を匡山によむ。漸、倦みて他行せし
時、道小して、老人の石小あて、斧をすする小あふ。
是をとへば、針小せむとて、するなりと云ひける
小感して、勤めて書をよみ、終に其の名を成せり。
小野道風は、本朝名譽の能書なり。若かりしとき、
手をまなべども、進まざることはいどひ。後園小
躑躅しけるに、蛙の泉水のほとりの、枝垂れたる
柳小、とびあがらむと志けれども、こゝかさりけ
るが、次第々々小高く飛びて、後にはつひよ、柳の
枝にうつりけり。道風是より、藝はつとむるよあ

ることを志り、學びてやまず。其の名世にたかく
なりぬ。

第十九 太田道灌 湯淺元禎

太田持資は上杉の家老なり。鷹野小出で、雨小
あひ、百姓の家入りて、蓑をかへ候へと云はれ
し小若き女物は何ともいはずして、山吹の花、一
枝折りて出しければ、花をくれよと、いふこと小
てはなしとて、腹立ちて歸られし小是を聞きし
人のそれは、

七重八重花はさけども山吹のみゆひとつ

だみなきぞかなしきといへる古歌の心小て、蓑
なしと申すことを、さ云はで、知らせ申したるな
りといひければ、持資駭きて、吾是程の事をすら
知らで、百姓の娘小劣れる事、口惜しとて、其より
書をよみ、歌小志を寄せられけり。
又ある時、下總國へ軍を出し、に、山涯の海邊小、
山上より石弓をはりたり。潮湛へたらば、通難か
りなむ。如何といへるに、折節夜半なるに、持資、い
ざ見て來むとて、馬を乗、出しけるが、其の儘歸り、
潮は干たりとて、軍を押し通されけり。これは、

上一段の活詞

遠くなり近くなるみの濱千鳥なく音に潮の満ち干をぞしるとよめる歌あり。それを思出て、千鳥の聲遠く聞えたれば、潮の干たるを知られたりとなり。又退口に、利根川を渡す時、夜にてくらさは暗い。いづこか浅瀬なるべきと、口々小云ひけるに、そこひなき淵やはさわぐ山川のあさき瀬にこそあだ波はたてとよめる歌あり。波の荒き所を渡せと下知して、難なく浅瀬を渡りけり。されば、昔より、武將は必學問に心をよせ、歌の道を

第三段のか、り結び

もよく知られたり。

第二十一 武藏野の紀行 北條氏康

天文十五年、仲秋の頃、武藏野を見むとて、いで立ちぬ。此の年月、思立ちぬることなれば、人々あまたうちつれ、小鷹狩にて遊ばむとて、みな狩の装束、馬より乗り、先鎌倉小ぞまうでける。あなたこそあなた、古跡をながめ、八幡山より、四方のけしきをながむ。若宮の御前にて、は萬代までに

さて、こゝかしこの谷々山々、由比の濱、大鳥居、古
寺、古跡を詠め、三田氏宗が宿所、一夜をあか
てゆく。頃を八月上旬、朝霧ふかく分入りて行く
よ、山あり。岩山と云ふ。此の山のうしろは、甲斐の
山、北、秩父など申し侍り。武藏の勝沼、二日逗
留して、それより、武藏野をかりゆく、まことに
行けども、はてしなく、萩、薄、女郎花の、露、宿
れる蟲の聲々、あはれを催すばかりなり。
むさし野といづくをさして分入らむゆく
も歸るもはてしなれば

若紫ハ紫式部
の作れる源氏
物語の中の卷
の名あり
白き鳥の云々
の詞ハ伊勢物
語の在原業平
東下りの文よ
見えたり

明くれば、八月十三日、朝きりいよ、深くして、
道も定、不見えわかず。馬にまかせて、長井庄よつ
きぬ。まことや若紫の巻よ、かゝるあさ霧を分入
らむとあるも、これなるべし。大澤庄などを行く
小、やうくすみ田川、小もつきぬ。河づらを見れ
ば、白き鳥のはしと足と、あかきがむれ居て、魚を
くふありさま、昔を思出づ。向て安房、上總、まのあ
たりに見渡さる。葛西庄、淨興寺の長老、一宿すべ
き由申されければ、河を渡り、彼の寺に一宿する
小、夜よ入り、風ひや、かよ吹きたり。あくれば、駒

文
中
學
言
本

をはやめ歸らむとて、もとの道にさしかり、い
つによるぎの磯傳ひ、日數つもりて、八月中旬、小
田原よこをつきにけれ。

第廿一 江戸のなりたち 佐野常氏

江戸は、今一東京とこをいへ。むかしは、月影の草
より出で、草ふ入ると、歌へるはかりひろく遙
き、武藏野の末より、西は限もなく、廣き野原ふ
つゞき、東の入、海は、廻りて遠く陸の間ふ入りこ
みしを、長き年月ふる間ふは野もかたはしより、
田島に開けしなるべく、海も川水ふれし流され

原
上
の
文
上
の
文
上
の
文

し、砂ふ埋められて、洲は陸につゞき、淵を島とか
はりつゝ、幾十度そのさまかはりつらむも、はか
られずなむ。

江戸の城も、康正元年に、上杉定正の家老なりし、
太田持資入道道灌の築けるなり。道灌の此の城
つくりし頃は、城のま近くまで、船こぎよすべか
りきとぞ。天正十八年、徳川家康公、この地の使と
きことを見定めて、移りをられしよりぞ、賑き都
とはなれりける。されど、此の頃の事あるせる書
ふよれば、城より東を、葭のみ茂れる、朝入ふして、

國
中
學
言
本

諸士の第にわり渡すべき地は、十町に足らず。かくては、大名の城下小はなるまどと、いひつる者さへありし由、見えなれば、その開けざりしさま、たしはかられなむかし。家康公も、道灌の築きし城を、本丸とし、四方の石垣も、湟も修めかへられて、大城となし、整へられき。さて四方の海の波穩、吹く風も枝を鳴らさぬ、御代となりしより、出入る人も、移住むひと、年ごとに敷まざるおつけて、神田山も崩され、下谷沼も埋められ、浅草は、隅田の川口より、程遠

き川上となりて、今は海苔の名よ、古のかたみを遺せるのみ。されば、貴人のきらびやかなる第のあたりを、狐狸の隠れし叢の跡ふして、商人のうるはしき家の下は、鯉鮒のひそみたる淵なりきとも、知る者なきばかり、うち開けたるを、いとめめでたくなむ。

第廿二 江戸士の風俗 太田 尊

安永、天明の初、の頃を、志ま琥珀の裏つき上下、夏は、仙臺平などを袴とし、麻上下も、繭をもて織れるものふて製す。小袖は、黒羽二重に限、諸大夫は、

常に白無垢を重ねて着たり。夏は絹縮の上品なるを着す。白紐の菅笠、黒き琥珀の合羽などを着し、大小を、細身に、赤銅鍔を用ひ、拵を、金無垢の彫、あるものを用ひ、印籠を、菊壽形とて、細長き五重の高時繪あるを提げ、價の貴きをもて、人小誇りたり。紅毛より齋來れる時計を懐にせり。夏冬、白き足袋を用ふ。誠に太平武を用ひざる風俗とやいはむ。翌の朝、服の他、心も、天の天明の末、節儉の令、一たび出て、忽、服飾を變じ、京さんじめなどをもて、袴小製り、津緞ツツは裏つけ

上一段の活詞
上二段の活詞

て、肩衣とせり。或は葛布小、小紋がたうちて、袴となせるもあり。提げものを、無地黒の印籠、或はなめし革の、大胴亂の見苦きを提げたり。網代アミの笠を被り、合羽を、さいみ、木綿などよて造る。一際當世めきたるは、蓑を着て行きかふさま、いどいかめしく見ゆ。足袋は、はな色、柿色などを用ひ、多くは冬もすあしなりき。大小を太身を好み、惣體銅よて作り、鍔を、鐵を以て拵とするもあり。小袖を、絹、紬の紋つき、又を、細き志まなども着せり。白無垢一つよ定り、麻上下を、なべて諸麻モロを着す。ゆき

下二段の活詞

長も短く着なす、藁の草履をはけり。
寛政の末に至りては、やうやく服飾の制も美く
見えて、常小羽二重の黒く深めたるに、紋つけて、
下はも白無垢を重ね、又八丈志まなど、小袖とし
て着るもあり。肩衣も、紹小裏をつけ、袴は唐さん
とめ、茶字志まなど、たもひくく、よ着なせり。夏も
紹緞などの肩衣も、精好志まなど袴とせり。帷子
も、さらし縮志ま縮など交へ着す。提げものも、異
國の革などを用ひ、蒔繪の印籠など、提ぐるもあ
り。大小も、鐵の拵、金の紋など、たき、又も象眼小

四段の活詞

も志たり。足袋も、夏冬、白きをはくこと、ふもなり
ぬ。殊小一般なるも、老若を問はず。皆常に杖を袋
に、持たすことなり。知らず、いかなる武用
ありてか。槍とひとしく、身を離たざること、ふか
と訝し。

第廿三 文の花ざかり 細川潤次郎

我が國、戦國となりてより、學の道も、たえなく、に
成行きけるを、元和の一統よりや、又やうく、ふ
開、初めはらう。今其の状を考へ、わたす、ふ、山をさ
へゆするばかり、吹き志きり、嵐の風静りて、尾

文
中
學
詩
本
の
卷

轉用名詞

上一段の活詞

の上の雪、み谷の氷柱、かつとけそめ、鳴かざり、
鳥の聲さへ、うす霞のひまに、のどけくなりゆく
につけて、降るともなき、雨もよほされ、吹く
どくもなき、風もさそはれつ、野山の草木のめ
もはるとなり、やがて蓄める花の、つぎ／＼小咲
きいで、思ひ／＼の色に白ひ、いひ志らぬ香の、
時めくよぞ似たりける。
百年あまりの程、上も下も、魂／＼み、心寒かりつ
るが、北ふく風、またく和みて、ひらめき、刃の霜
も影きえはて、凄かり、兜の星も、光かくれつる

四段の活詞

より、仇まもる城の邊の松も、千代よぶたづの
聲霞みて、春の光のどやか小なりに、しま、久く
かげまばらなり、諸越種の古根より、はやく萌
出で、漢學の若葉は、立茂りて、つひに林となり、
ちりばひ、種より、幹枝さ、漆ひつ、いたく世
の中、おそはびこりける。
又御國のふる事を根ざし、とて、みづく／＼く
崩え、お、岡部の一くさ、さま／＼小分れて、うす
くもこくも、咲きいで、おき。この花どもを、色さへ
香さへい、み、く、て、もろこ、種の草木よもに

久志伎の活詞

い
み

國
中
學
詩
本
の
卷

なへに
長こ
心づひ
心づひ

ほひ、人の心の花にさへ、かをりあひぬ。かく時を
えて、やまと、もろこし、どりどり、千種の色の匂
ふなへよ、新井の清水をよすがよて、根ざしそめ
つる、異くに、の、學、草さへたひは、トめて、めづ
らかなる色よぞ、咲初めける。今かく、たなと苑生
のうち、内外のほひこきまぜつ、春の錦と
見わたさるれど、あはれ、來む秋ふも、いかなる實
をかむすぶらむと、己が世を思ふ心のすさひよ
りぞ、すさろまうち傾かれぬる。

第廿四 大成殿上梁私記 藤原安辰

頃は寛政己未の年なり、昌平坂の大成殿落成す。
抑、本朝ふて、孔子の廟を建て、釋尊を行はれしこ
とを、大寶元年丁巳ぞ始なるとかや。中古、其の事
絶えてけるを、慶長のむか、東照公、殊小御心と
とめさせられ、そののち寛永十年、林羅山の忍岡
なる別荘に、尾張義直卿、是を營ませられ、聖像、及
四配の像をも置かれたりしを、元禄三年、台命あ
りて、いまの神田の地に遷されしなり。大成殿の
三、大字を、御筆を、めさせられて、これをか、げさ
せられ、此の邊、昌平坂となふべき旨、事よさ、

れけるも此の御時の事なりとぞ。
志かしてより此のかた百餘年春秋二度の祭禮
たゆることなくよ、林家よてうけたまはれり。
其の後も又志ばく回祿あり近くと天明七年
災ふか、りしを假ふ營ませられしなればすべ
て事そがれたるを今の世ふあたりて古文の教
みさかりよ行をれけるよりかく新ふ造改めら
れしなるべしこたびの殿宇もそのかみ水戸光
圀卿舜水翁ふはからせて三十分の一ふ造りた
かせられける形のまふつくらせられたれむ

後
考
そのれ

轉用名詞

いと珍らかなること多かり東西の回廊の内
皆石をもてたみみな小屋の上ふある鬼狹頭な
どいふものは此の國には聞かざりしを舜水翁
の物せし圖ふよりて高名の匠ども日夜心を委
ね思をこらし斧をめぐらしつて造りしなれむ
聞きしふもこえて目驚くばかりなり丹青の彩
なべてひた黒はぬられたるかへりてかうく
かねて經營の料は良材をはこび來しかば合抱
の木を更なり棟などを殆牛をもかくしつべし
千曳の石をもこしらものして新ま數千歩の地

石
全
木
の
上
の
石
を
も
こ
し
ら
も
の
し
て
新
ま
數
千
歩
の
地

をかこひ入れ廻ひろういは垣つきめぐらした
り。内小立列ねたる講談所あるを物學ぶべき局
などかれこれいひもてゆかむもくたけけ
れむ書きさしつ。去年の春事始ありより庶民
子の如く來り物せいかむさはかりの經營なり
しも今年長月の末つかた土木の功を終へぬ。
第廿五 大成殿上梁私記 二 藤原安辰
かくて上梁の式行はる事十月廿二日辰の刻
と旋てたり。やつがれも此の事よあつかりぬれ
む卯の鼓うつ頃かここよ至りぬかなたこなた

上一段の活詞

幕うちめぐらし兵の具どもあまた立てならべ
たるいと嚴なり。仰高門の右の方にやぐらをか
まへて餅さてを金銀の箔もてたへたる錢大
なる器にもりたり。東の廻廊の所小四五尺ばか
りのやぐらあり。聲かけ櫓といふ。上小素袍着た
る男殿の方小向ひ長袴きたる人これ小そふ。
殿内小壇を設く。引きはへたるとばり目もあや
なり。内小鏡を安し幣弓矢など壇の東西に立て
ならべ餅など備ふ。殿の屋の上小も櫓を構へ餅
錢さまの物を備へ色どり一方二尺ばかり

10
あり
た

の盤、槌をそへておけり。西の廻廊の上の方、
疊志きこ、惣奉行、伊豆、守信明朝臣の席とす。そこ
へだて、林大學頭、大目付、御勘定奉行、作事奉
行、同く事うけ給り。誰をれ等のしめ長袴きて
座せり。東の廻廊の上の方、御納戸頭、けふ賜
るべき祿銀、臺小のせて座す。

信明朝臣、御供所、小休ひけるが、御目附、案内あり
て、出座せらる。時、御大工頭、式は、トめの由を告
ぐ。やがて、杏壇門ひらき、匠の長、錦のたほひした
る、棟札を抱きて進む。其の志り、小素袍、布衣きた

玉女房
棟杖の役

る玉女房、棟杖の役などあまた、次第たゞしくね
りもて行き、殿前、小いたる時、匠の長、棟札を出し
て、殿内へ進み、壇に納む。次、小玉女房、ぬさを壇上
へ納む。棟杖の役、梯より屋へ昇る。正面の石の上
に、幣の盤をすゑ、其の前、小膝つきあり。匠の長、其
の上へ上りて、ぬかづく。玉女房、壇上の幣をとり
て渡す。匠の長、これをうちふるごと、三度、幣の串
もて盤をうつ時、櫓の上へ、素袍きたるが、千歳棟
と、高らか、小唱ふれむ。棟杖、屋の上へ、盤をうつ
音高く聞ゆ。殿内にも同く音す。次、小萬歳棟、また

文
中
學
讀
本
一
の
卷

永榮棟と唱ふ。其の度ごとふ、槌うつこと始の如くす。匠の長ぬさを玉女房不渡し、これを壇に納め、洗米を供せり。上棟の式終りて、信明朝臣、殿内西の方不出座せられ、祿賜る事はて、辰の半刻ばかり、各まかてぬ。仰高門の餅と錢とを、式終る時、群居りし者ども、不まき與へられたりとかや。かねて設の式聞き傳へ、ちかき遠きをいはず、老いたるを扶け、幼きを負ひ、夜をこめて群來り、道もさりあへず集ひたるを、かこき御代の志るなるべし。

上二段の活詞

第廿六 口ローマ人 新井君美

大隅屋久島の粟生村といふ地、不阿波の漁人等來止りて、魚捕る事を業とす。寶永五年八月、これら七人、舟をうかべて、湯泊といふ村の沖不出づ。陸より、三里ばかり隔てたらむ海の上、不目なれぬ船の大なるが、一隻うかびるしを見つけて、粟生村をさして歸るに、彼の大きな船より、小なる舟をらしめて、こなたの舟を追來ぬ。わづか不十間ばかりをへだて、見る。不其の舟不も、目なれぬものども、十人ばかり乗りたるが、其中一人、水

上二段の活詞

國
中
學
讀
本
一
の
卷

を乞ふさま去たり。こなたよも、かなふまどきさ
まして、乗りゆくほどよ、彼の小舟も、大なる船の
方よ向ひて歸りぬ。

次キの日、彼の島の戀、泊りといふ村の人、炭焼かむ料
よ、松下といふ所よ往きて、木を伐るふ、うろの
方よ、人の聲志けるをかへり見るよ、刀帯びたる
もの、手してまねくあり。其のことばも、聞きわ
くべからず。水を乞ふさまを志ければ、器よ水汲
みてさしたく、近づき呑みて、又招きしかど、其の
人、刀を帯びたれを、恐れて近づかず。彼も其の心

をさとりぬと見えて、やがて、刀を鞘ながらぬぎ
て、さし出しければ、近づくと、黄金の方なる一つ、
取り出してあたふ。此の者、昨日見えし船人の、陸よ
上りしふやと、思ひしかむ、其の刀をも金をも取
らずして、磯の方よ打ち出して、見るよ、其の舟も見
えず。立ち歸りて、近き村々よ人はしらせて、かくと
告ぐ。
此の事、島を守れる者の許よ、聞えしかば、薩摩守
の許よつぐ。薩摩の家人、連署して、長崎奉行所よ
告ぐ。彼の人、長崎よ送致すべき由を、云ひ送れり。

かくて冬ふ至り、長崎の網場よ至りぬ。こよより長崎よ迎入れて、獄舎よ置く。阿蘭陀の通事して、彼の來れる由を問ふ。小き、わくべからずと云ふ。阿蘭陀人の内よて、昔彼の地方の詞學びし者めし具して、出合ひたり。これ小よりて、彼の人、ここふ來れる事の由、聞きえて、奉行所の注進あり。其の明年、參らせよと仰下されし。小よりて、去年より、彼の者のいふこと聞きなれし通事、三人つけて、長崎を出したてし。小、十一月小來着きぬ。れむ、切支丹の法を、禁ずること司れる、奉行の人々

よ仰せて、その廳の獄舎よ按置せらる。

第廿七 口口口人二

新井君美

かの口口口人、長、高きこと、六尺ふを遙、すぎぬべし。普通の人を、其の肩よも及ばず。頭、かぶるよして、眼、深く、鼻、高し。身ふを、茶褐色なる、袖細の綿入れし、我が國の紬の服着たり。こそ、薩摩の國守の與へし所なりと云ふ。肌よを、白き木綿の、單なるをきたり。通事よ命トて問をしめて、其の云ふ所を聞く。小、かねて、はかりしごとくに、事煩からず。但、其の言ふ所を、我が畿内、山陰、西南海道の方言、

うち交りて、彼の地方の聲音よて、操りいだしぬ
れど、正しく其の事と思ふも、疑ひぬべき事あり。又
あやまり傳へしことも少からず。通事等も、阿蘭
陀の語は熟しぬれど、舊習よひかれて、彼の云ふ
所の如く、云ひえ難き事どもあるを、教言ふ事な
どもありき。かくして、打ちきくこと、一時ばかり
の後よも、某もみづから、問ひもし、答へもする事
あり。凡、其の人、博聞強記よしして、彼の方、多學の人とき
こえて、天文、地理の事小至りても、企及ぶべしと

も覺えず。また謹懃よしして、小善も服する所あ
りき。其の人、庭上の榻よつくに、先手を拱し、一拜
して坐す。奉行の人々、又某の坐を立つことあれ
む、必ず起ちて拜して坐す。還來りて、坐よつくを見
ても、必ず起ちて拜して坐す。此の儀、日々ふかはら
す。あるとき、奉行の人の、くさめせーを見て、通事
よむかひて、天寒し。衣をかさねらるべき歎。我が
國の人を、くさめすることをむつゝ、むといひ
き。
又ヲ、ランドの戦船よも、其の傍よ、多の窓をま

文
中
學
讀
本
の
卷

國
中
學
讀
本
の
卷

うけし事、上、中、下の三層あり、窓ごとに、大砲を出
したりといふことを、いひ得ずして、かたどりの
はむとすることも、やすからず。其左手を側て、
その四指の間より、右手の指頭、三つを出して見
せぬれを、さこそ候ひけれと云ひて、通事等にむ
かひて、敏捷よればし候ふなど、いふことどもあ
りき。

第廿八 保己、一古書を訂す。伴 信友
替者職、檢校、塙保己、一も、幼き頃より盲、赤て、白黒
の色のけぢめだに、心よ知らぬ身として、あや

く書を好みて、人に讀ませ、聞きては、頓てそら小
浮べて、忘る、事なく、こゝらの古書を廣くあつ
め、世よ隠れたりける珍書どもをさへ小、あまた
求出し、校訂して、これかれのめでたきを、つき
よ摺本となし、又百枚小たらぬばかりの書ども
を、千二百七十餘部、とり集めて、群書類従と號け
たるを、六百三十卷あまり、摺本小なして、世小あ
らはし、猶それ小漏れたるを、又前にもまさるば
かり、續編とすべくものして、志た構の目錄を、は
やく摺本小して、世にいだせり。

活用せぬ辭

又古書どもを参考へて、書きと、のへたる書ども、何くれと見え聞えて、とりどめてたき中小、公に聞えあげて、纂めたりと云ふ史料を、殊ふ大なる功ふなむありける。さて、かの史料は、宇多帝の御世をはじめ、近き御世にも及ぶべく、志たがまへして、己が無からむ後の事まで、よく認めれき、過ぎ小し文政五年の七月九日、八十あまり小て、身まかりぬとぞ、あはれ、その始を聞けむ、常のよろほひ盲よてありつるが、書まなびの道よ、志ふかく力を出せる、勲みふよりて、其の

ひまろ

又古書ども

徒のよき階小進み、つひ小其の長とある職、檢校と云ふよさへなされて、世を盡せるを、古より類なき人にこそありけれ。保己、一家の號を温古堂と稱へ、番町小和學所をたこし、數百卷の書を刊本となしぬ。誰人もたやすく古書を、うかひうることもなりしを、この檢校小して、異國小も例なかるべし。或日、加納侯の侍臣の、湖月鈔を尋ねし、其の答の、つまびらかなりしを聞きて、ほどく感とよけり。檢校、一年、都に登りし時、浮島原よて、

屋敷

果昔言の葉の及むぬ身よと目に見ぬも中々よ
小や雪の富士の嶺又木曾路より登りし時、碓氷
峠をこゆとて、
もみぢ葉のうすひの御坂こえしより猶ふ
かゝらむ山路をぞ思ふとよみたりとぞ。

第廿九百君平山陵を求む 瀧澤 解

久志幾の活詞

人の心は、目も見えぬものからよきもわるきも、
たもなべて、なき後よこそ定なれ。さばれ、禄もな
く、位もあらで、名を後の世よ遺せるものも、其の
人の徳と、學の力とによらぬをなし。吾が友、脩靜

庵の主是なり。脩靜庵を、元、福田氏、後、小、其の先祖
の氏郷朝臣の族より、出でたりと聞きて、氏を蒲
生と改めけり。名を秀實、字を君平、脩靜を其の號
よて、下野宇都宮の人なりけり。脩靜、讀書を嗜み
しかば、耕耘することをほりせず。商人のわざをね
がはず。脩靜はやくより、石橋翁の門小入りて、勤
學こゝに年あり。大母の物語、小よりて、祖先の賤
からぬを知り、みづから氏を改めて、志いよ
堅く、貧きを辭せず。

轉用名詞

一日、つらく思ふやう、昔南北朝の亂より、應仁

の兵火不より、天朝の舊典、ことごとく亡失し、文
華も、永く地を拂ひぬ。いかで、吾が古學を興して、
國體を張り、力を竭して、國恩を報ゆべしと、志願
の臍をぞかためける。かゝりし程に、年月をへて、
江戸へ往來し、林家の門人となり、高名なる學者
と、交ること又年あり。然れども、持論時情不かな
はず。狂妄として、嘲、哂むぬ人は稀なりしを、脩靜
物の屑ともせて、愈、守りて、みづから賤さざりき。
此の頃よりして、志を編まむとする志あり。古の
山陵、多く荒廢して、其の蹟さだかならざると、聞く

合成名詞

こと久きをもて、先、山陵志より始めむと、獨行し
て京へ趣き、南海より、淡路へ渡る。路費の乏きを
を憂しとせず、險阻を履み、風雪を犯し、六十六國
の半を経歴し、或も里老へ問ひ、或も舊圖を考へ、
苦辛をその著述のために辭せず。月日を旅寢不
うつれども、その志、うつらざして、いよく精力を
ぞ盡しける。とかくする程、山陵志やうやく稿
を脱し、刻本よせまくほりすれど、擔石の儲、なけ
れば、其の友、鍵屋靜齋等の資を借りて、製本また
く成りしかむ、これを有職の人々へまゐらせけり。

志かるに、浪人の論ふべき事小あらず。分よすぎたりとて、市のかみの廳に召されて詰られし、君平古實を證として、答へまうすこと、理ふかなひしかば、かさねて、咎はなかりけり。君平、教授小口を糊ふものから、山陵志小つぎ、職官志を彫らむとす。財用足らで窮すれども、志氣傑出して、國を憂ふる心、十日半晌、撓むことなし。

上三段の活詞

第三十 大和の檜隈の御陵、本居宣長、平田と云ふ里小至りて、御陵を尋ぬるに、野中の高き所小、松三もと四本にひて、かたつま崩れ

羅行四段の
格の活詞

たるやうなる塚あり。これなむ文武天皇の御陵とまうす。そこを過ぎて、又野口と云ふ里よて、こかこ尋ねつ、田のあぜ傳の道をたどり行きて、一つの御陵ある所小いたる。こを、や、高きのぼる岡の上小、いと大なる石して、かまへたる所なり。南むき小、横も豎も、二尺あまりなる口のあるより、のぞきて見れむ、窟のやう小て、内をせばく、下を土ふうづもれて、わづかよはひ入るばかりなり。上には、豎横一丈あまりの、ひらなる大石を、物の蓋のやうよたほひたり。

合成名詞

羅行四段の
格の活詞

其のうしろよつゞきたる所、一丈四五尺がほど、
や、平よて、中のくぼみたるは、近き世、高取の
城きづくとして、大石ども、ほりとり、跡なりと云
へり。亂れたる世、物の心も知らぬ、むくつけき
武士の、志わざとを云ひながら、いともか、こき
帝の御陵をしも、さやうよ、堀りちらし奉りけむ
事の、心うさよ。そこ、小藁火など、焚棄てたる跡の
見ゆるを、あやしきかたるなどの、住みか、ふつ
るなめりと、思ひしも、ゆるく、やがて、此の御山の
下よ、さるものども、多く集りるたりき。これを、武

烈天皇の御陵なりと、まうすなるを、所たがひて
覺えし故、そのわたりよて、これかれ、ふとふに、
皆さ云へるを、いかなること、か。延喜式にのせ
られたるを見る、ふすべて、この檜隈、御陵とま
うすを、欽明天皇、天武天皇、持統天皇、文武天皇、ふ
て、たはします。このうち、いづれが、いづれよて、た
はしますらむ。今を、さだか、ふわきまへ難し。
第三十一 多武峯 本居宣長
ゆき／＼て、倉梯里、いいでぬ。こゝは、かの櫻井よ
りくるみちなりけり。初瀬より、こゝ程を、二里、多

四段活一格の活詞

武峯までを、猶一里有りとぞ。志ば一休める家小
て、例の都の跡を尋ぬれむ、主此の里中よ、金福寺
と申す寺ぞ、その御跡よを侍る。このたをしける
道なる物をとて、子小やあらむ。十二三ばかりな
る童をいだし、案内せさす。これにつきて、ゆき
て見る。彼の寺と云ひしを、門などもなくて、いと
かりそめなる、菴よなむありける。さきの家よ歸
りて、又御陵も、いづこそととへむ、そを忍坂と申
す村より、五丁ばかり辰巳の方にて、こゝよりを
廿町あまりもありといへむ、えゆかみやみぬ。

さて、この里を出で、五丁ばかり行きて、土橋を
渡りて、くらはし川を左よなして、流小をひつゝ、
上、行く。このかゝは、多武峯よりいで、倉橋の里
中を、北へ流、行くなり。なほ同一川岸を、やうく
よ上りもてゆくまゝ、いと木ぶかき谷陰小な
りて、左右より谷川の落合ふ所よいたる。瀧つ瀬
のけしき、いとたもしるし。そこの橋をわたれむ、
すなをち茶屋あり。こゝを、はや多武峯のくちな
りとぞいふ。さて二三町がほど、家たちつゞきて、
又うるはしき橋あるを渡り、すこしゆきて、惣門

久志幾の活詞

よいる。左右小僧坊ども、こゝらなみたてり。御廟
の御前も、やうちはれて、山のはらよ、南むき小
たち給へる。いといかめしく、きら／＼とくつく
りみが、れたる有様、めもかゞやくばかりなり。
十三重の塔、又惣社など申すも、西の方より立ち給
へり。
すべて、此の所みあらかのあたりを、更よも云を
ず。僧坊のかたはら、道のくま／＼までさる山中
よ、落葉の一つだはなく、いと／＼きら／＼かよは
き清めたること、又たぐひあらと見え。櫻も、今

をさかりよて、こゝもかゝこも、白たへよ咲きみ
ちたる花の梢、どころがらを、まゝてたも、しるき
こと、いとむかたなし。さるを、みな移しうゑたる、
木どもよやあらむ。一樣ならず、くさ／＼見ゆ。そ
も此の山よ、かばかり花のたほかること、かねて
をきかざりきかす。

第三十二 藤原鎌足大臣、北畠親房、
蘇我蝦夷の大臣、并よその子、入鹿、朝權を專に、
て、皇室をないがしるよする心あり。上古よりの
國記、重寶、皆私の家よ運びでけり。中よも、入鹿悖

助用辞

この天皇とハ
皇極天皇なり

逆の心甚し。聖德太子の御子達の、科なくまじく
しをも、亡し奉る。爰は、皇子、中大兄と申すも、舒明
の御子、やがてこの天皇の御所生なり。中臣、鎌足
連と云ふ人と、心を一ふして、入鹿をころしつ。父
蝦夷も、家小火をつけてうせぬ。國記、重寶みな焼
けふけり。蘇我の一門、久く權をどれり。しかども、
積惡の故、小や滅びぬ。山田、石川、麻呂と云ふ人
ぞ、皇子と心を通し申しけり。む、滅びざりける。
この鎌足の大臣も、天兒屋根命の二十一世の孫
なり。昔、天孫あまくだり給ひし時、諸神の上首よ

轉用名詞

て、この命、殊に天照大神の勅をうけて、輔佐の神
にまします。その孫、天種子命、神武の御代、小祭事
をつかさどる。上古を、神と皇と、一つふまじく
しかむ祭をつかさどるも、即政をとれるなり。そ
の後、天照大神は、トめて伊勢國よ志づまりま
し時、種子命の末、大鹿島命、祭官になりて、鎌足、大
臣の父、小徳冠、御食子までも、その官よて、仕へた
り。鎌足よ至りて、大勲をたて、世小寵せられし小
よりて、祖業を起し、先烈をかば、やかさけけり。神
代よりの餘風なれむ、然るべき理とこそ覺え侍

助体辞

助用辞

札。天智天皇即位四年、内臣鎌足を内大臣、大織冠とす。又、藤原朝臣の姓を給ふ。病の間亦も、行幸してとぶらひ給ひけりとぞ。藤原の大臣、鎌足の子、不比等の大臣、執政の臣よて、律令などをも撰定められき。藤原の氏、この大臣より、いよ盛よなれり。四人の子は、一き。武智丸の大臣の流、南家と云ふ。房前の流、北家といふ。今の攝政大臣、及志かるべき藤原の人々も、皆この末なるべし。宇合の流、式家と云ふ。麻呂の流、京家と云ひしが、早く絶え小けり。南家、式家も、

儒胤よて、今に相續すといへども、唯北家のみ繁昌す。房前の大將、人小異なる陰徳こそ、たをいけめ。不比等の大臣も、後よ淡海公と申すなり。第三十三 宇治の平等院 文祿清談 昔、宇治の關白藤原頼通公、平等院を御建立あるば、されて善つくし美盡して、たほくの貨財をなげたまひけりとぞ。さて本尊も、天下無雙の佛工、定朝法眼が、一刀三禮の阿彌陀如來小て、莊嚴七寶をつくり、赫々たり。内陣四壁の彩色の繪を、わが國よならびなき畫どころの、為業が筆といへ

り。觀經の文を詩文能書の御ほまれまします具
平親王の御筆跡小て飛龍廻天のいきほひを得
たまひたりし、字畫なりと云ふ。此の伽藍御建立
のいふへより、既六百年の星霜をふれども
いまだ一炬のわざはひなけれむ、依然として、上
古のかざり光彩をます。誠よ又たぐひなき靈場
なり。
むかへ以仁親王、御謀叛のとき、源三位入道、いの
ちを輕し義を重し、一戰の功を勵すといへども、
大軍のせめまぬかれがたくして、形體を古岸の

合成名詞

苔よさらし、姓名を長流の浪に漂し、も此の所
なり。此の軍中の争鬭にも、一椽一瓦の損亡なく、
いまふめでたき靈地なり。
さて、總門を北向なり。これを古當寺草創の初、賴
通公、先、總門の便宜を、わづらむせ給ひける折ふ
し、四條の大納言公任卿參りて、雜談ありけるふ、
賴通公のたまえく。此の地を、東は川南を山、西を
うしろよて、北より外ふ、大門をたつべきたより
なし。北は總門のある寺や侍ると、たづね給ひけ
るよ、さしも和漢の才博き、公任卿も、覺悟なかり

けるよ、江帥匡房、其の時と、いまだ弱冠ふして、車
の志り小相乗^りて、同くまゐられたるよ、もしさ
やうの寺や候ふと、問えられぬ、匡房のいとく。
先、我が朝よと、六波羅密寺、空也上人所在の寺、漢
土よと、西明寺、圓側國師所在の寺、天竺よと、大那
蘭陀寺、三國よ通^{して}て例侍りと、傍若無人ふ申さ
れければ、博達^の公任卿も、奇異の思をなして、感
動志ばらく止まざりけり。頼通公も御悦喜よて、
さては、さやうの例もありけるよや仔細なき事
なりとて、頓て北むきよ、總門を立てられけりと

なむ。すなわちいまの山門の事なりとぞ。

第三十四 渡部競 室直清

渡部競も、源三位入道頼政が所従の士よと、第一
のものなり。然るよ、治承年中、頼政、高倉宮をす
めて兵を起し、時、京師を急よ發して、倉皇と
て三井寺へ趣きしが、打、忘れてやありけむ。競よ
かくと志らせざり。程小、競志むらく猶豫して、
家ありしを、平宗盛聞きて、日ごろ競が魁偉な
るを見て、己が所従よせまほしく思ひしが、頼政
が親臣なれむ、請ふべきやうもなかりしよ、この

羅行四段一格
の活詞

たび、競ひとり都に残りとき、て六波羅に参
れと、人していはせけむ、参りけり。
宗盛、對面して、汝今より我ふつかへむ、入道の恩
小をまさるべしとて、小槽毛といふ馬小、貝鞍お
き、乗りかへの料とて、遠山といふ馬を引きそへ、
黒絲たごりのよろひ胄まで、皆具してたびけり。
競かこまり給りて、ほくそ笑しつゝ、罷歸りぬ。
一族、家人うちよりて、入道殿、是程の大事を思ひ
たち給ふふ、ひとり残されしを、實に遺恨なり。大
將のかくかたらひ給ふも、いなみがたし。時の花

をかざしふせよといふことあれむ、たゞ此のま
まにて、あれかといふ。
競、いやとよ、勇士の義、さをあらすとて、宗盛より
たびける鎧着て、小かすげよのり、郎等七騎うち
つれて、三井寺へとて打出せしが、六波羅の門前
を通りし時、馬小のりながら、門の内へのぞきつ
つ、高聲よ云ひいれけるも、競こそ只今下賜りし
馬よのり、三井寺へ罷越し候へ。御眷顧を蒙り候
へども、三位入道の恩、忘れがたく候へむ、此の度
死をともしいたすまで候ふ。御門前をむなしく

羅行四段一格
の活詞

打過ぎむと、ほいなく候へむ、御いとまを申し候
ふとて、三井寺のいたり頼政と一所となりしが、
其の後、宇治橋の合戦のいさぎよく討死にして
けり。
第三十五、重盛父を諫む所の平家物語
太政の入道も、かやうの人々あまたいましめ置
きて、も、猶心ゆかずや思われけむ。赤地の錦の直
垂、黒絲織の腹巻の、白金物打ちたる胸板せめ
銀の蛭巻、未たる小長刀を、脇にはさみ、中門の廊
よりぞ出せられたる。貞能をめす。筑後守貞能も、木

蘭地の直垂、緋織の鎧きて、御前は畏りてぞ候
ひける。
入道のたまひたるを、いかは貞能、此の事をいか
が思ふぞ。入道君の御為、既に命を失むむとす
ること、度々及ぶ。されむ人何と申すとも、いか
でか、此の一門をむ、七代までを思召すてさせ
給ふべき、又、動もすれむ。此の十門を亡さるべき
由の御結構こそ然るべからぬ。此の後、も、讒訴す
る者あらむ、當家追討の院宣を、下されむと覺ゆ
るぞ。朝敵となりて後を、いかは悔ゆとも、益ある

また、大かた入道、院方の奉公思、切りたり。馬は鞍
置かせよ。きせなが取、出せとこそ、の給ひけれ。
主馬判官盛國、いそぎ小松殿へ参り、かくと申し
けれむ。大臣いそぎ車を飛むして、西八條殿へぞ
たむしたる。門前まで車より下り、門の内へさし
入りて見給ふ。小入道、腹巻をき給ふ。うへ、一門の
御相雲客數十人、各、いろ／＼の直垂、お思ひ／＼
の鎧きて、中門の廊ならび、旗竿どもひきをば
め、馬のはるびをかため、甲のを、しめ、只今皆打
立たむ。ずるけしきなり。小松殿、烏帽子直衣、大

紋のさしぬきのそば取りて、さやめき入り給へ
は、殊の外、ぞみえられける。入道、あの姿は腹巻
をきて、向むむこと恥、うや思をれけむ。素絹の衣
を着給ひたりけるが、胸板の金物、すこしはづれ
て見えけるを、引きちがへ、そと給ひける。
大臣を、舍弟宗盛卿の座上、よつき給ふ。入道の給
ひ出さる、こともなく、大臣も又申しあげらる
るむねもなし。や、ありて、入道の給ひけるを、あ
の成親卿がむほんを、事のかずよも候をず。一向
法皇の御結構まで候ひけるぞや。志ばらく世を

志づめむ程、法皇をむ鳥羽の北殿へうつり参ら
するか。然らずむ是一まれ、御幸をなし参らせむ
と、思ふをいかふとの給へむ、大臣きゝもあへ給
てず、はらくとぞなけれ。大第三十六、重盛父を諫む二、平家物語
や、あつて、重盛を涙を木さへ、此の御有様を見
参らせ候ふは、更に現カクとも覺えず候ふ。我が國初
りしより、太政大臣ともあらむ人の甲冑をよろ
ふこと、たやすきことよを候ふまど、就中、御出家
の御身なり、法衣を脱キ捨て、忽キは弓箭を帶キま

まさむ事、内よを破戒無慙の罪を招き、外よを
仁義の法よも、叛き候ひなむず。御心を志づめて、
重盛が最後の言を、聞キし候へかし。
まづ世に、四恩といふことの候ふが、其の中よ、尤
重きを朝恩なり。普天の下、王上よあらずと云ふ
ことなりとこそ、承れ。いそんや御身よ至りて、先
祖よもいまだ聞かざりし、太政大臣をきえめさ
せ給ひ、重盛が無材愚闇の身を以て、蓮府槐門の
位よ至る。志かのみならず、國郡半を一門の所領
たり。是等莫大の朝恩を、忘れさせ給ひ、みだりが

をく、法皇を傾け参らせ給をむ事、神慮よもそ
むかせ給ひ候ひなむず。抑、當家の運命、いまだつきざる小よつて、御むほ
ん現れ、仰せあてせらるゝ、成親卿を召し、たかれ
ぬる上を、何の恐れ候ふべき。所當の罪科行をれ
ぬる上を、君の爲よ、いよく奉公の忠勤を盡
し、民の爲よ、ますく撫育の愛憐を致させ給
を、神明佛陀も感應ましく、君よも思召しな
ほさせ給ふ事、なか候てざるべき、かく申すを
も聞こしめされず候て、今より重盛を院の御

所を守護し参らせ候をむ

悲きかな。君の御爲よ忠を致さむとすれむ、父の
高恩、忽ち忘れむとす。いたましき哉、不孝の罪を
のがれむとすれむ、君の御爲よ、既よ、不忠の逆
臣とも成りぬべし。申しうくる所詮を、たゞ重盛
が首を召され候へ。いつまでか、命生きて亂れむ
世をも見候ふべき。たゞ末代よ生をうけて、か
るめ小あひ候ふ、重盛が果報の程こそつたなう
候へ。今も侍一人小仰せつけられ、御つぼの内へ
引出されて、首を刎ねられ候へとて、さめくと

泣き給へど、其の座はなみ居給へる、一門の人々、
みな袖をぞぬらされける。何れは、
さゆふは、
世は、
御首、
御も、
高恩、
後ち、

文中學讀本一の巻終

文法摘要

一名詞の事
一動詞の事
一てにをはの事
一係結の事
名詞の事
この學期中は教ふるを見やすき四種の名詞を知らしむる
よあり。さて名詞を體言とも云ひて、形のあるとなきを問
はず、一物の名として呼ぶる、物を勿論動らかぬ詞どもを
む、總べて體言といふなり。名詞のうちよ種々の別あれど、今
て有形無形轉用合成の四名詞を知らしめむとせり。有形名
詞とも形ある名詞ふて、山川村里人獸草木等皆この類なり。

無形名詞とも名ありて形なき物よりて、心情たろかあたり等、皆この類なり。轉用名詞とも、動詞より轉りて、名詞となりたる物より、思、疑、樂、哀、報、恨、等、皆この類なり。合成名詞とも、二詞の集りて、一つの稱となれるものより、夕烟、島山、夜半、鷹野、肩衣、等、皆この類なり。

動詞の事

この學期中、教ふるも、動詞の中にも最主なるもの此活き状と、其の名目とを知ら志むる小あり。さて、動詞とも名詞の下に附きて、其の活用をいひ現す詞より、語尾の轉變る詞どもをいふなり。今動詞中より、四段活、上一段活、上下二段の二活、羅行四段の一格、久志幾の活等の状を左に説くべし。

四段の活

四段の活とも、五十連音の第一段の列より、第四段の列まで、語尾の轉りかゝる詞をいふ。すなわち、咲くといふ詞を、咲か、咲き、咲く、咲けと、活くが如き類の詞を云ふなり。

釣	任	逢	往	打	押	飽
ら	ま	は	な	た	さ	か
り	み	ひ	に	ち	し	き
る	む	ふ	ぬ	つ	す	く
れ	め	へ	ぬ	て	せ	け

上一段の活

上一段の活とも、五十連音の第二段の列より、二音添りて、活く詞をいふ。すなわち、着ると云ふ詞を、ききる、きれと、活くが如き類の詞を云ふなり。

着	似	干	見
き	に	ひ	み
きる	きる	ひる	みる
きれ	きれ	ひれ	みれ

射 居
い ゐ
い ゐ
る ゐ
る ゐ
る ゐ
れ ゐ

上二段の活

上二段の活とむ五十連音の第二段の列と第三段の列との
二段よるれの二音添りて活く詞をいふ。すなわち生ひと云
ふ詞は生ひ生ふ生ふる生ふれと活くが如き類の詞を云ふあり。

起	堀	落	忍	恨	老	率	舊
き	ち	ひ	み	い	る	り	
く	す	つ	ふ	む	ゆ	る	
く	ず	つ	ふ	む	ゆ	る	
ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	
れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	

此の活段よる清

下二段の活

下二段の活とむ五十連音の第四段と第三段との二段に
れ||の二音添りて活く詞をいふ。すなわち與へと云ふ詞も與

へ與ふ與ふる與ふれと活用くが如き類の詞をいふ。

得	受	瘦	捨	兼	堪	譽	消	飢	枯
い	り	け	け	ぬ	へ	め	え	え	れ
う	す	う	ぬ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	
る	る	る	る	る	る	る	る	る	
れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	

羅行四段一格の活

羅行四段一格の活も世は羅行の變格とも又有居の活とも
云ふ。羅行四段の活用の如くなれども語尾のりの音よて截
斷言となれるものよて即有り居り侍りの活用詞これなり。
又四段活の詞も奈行を除くの外うつりて悉く此の活用
詞となるものなれむ其の數夥多なり。即開けり押せり打て

めら くら べく べし べき べき べけ まど けれ
せめ 志む 志むる 志むれ
けられ する する する する する
な につ ぬ ぬ ぬ ぬ
て なる なる なる なる なる
此の他尚有れども、そを次々云ふべくなむ。

係結の事

この學期中に教ふる係結の法を、最容易きものをいさゝか知ら志むるふあり。さて係結の法を、てにをはの調ともいひて、最大切なるものなり。抑此の調とも、文章上の名詞、或も動詞の下にあらむきたる辭よりて、たのづから下よあらむべき斷止詞と、一定の定りあるを云ふなり其の上よあらむれたるを係辭といひ、下よあらむれたるを結辭といふ。

志かして此の係結は、三つの種類あり。即係結格の第一段、第二段、第三段の差別これなり。第一段の係辭を、其の數多く、てにをはもどばど等の辭よりて、截斷言ふて斷止り、第三段の係辭を、そやかなむの四辭よりて、連體言ふて斷止り、第三段の係辭を、こその一辭よりて、已然言ふて斷止るが定なり。截斷、連體、已然等の説明は、後の卷にていふべし。今、見やすき例を左よあぐ。

第一段の係結

是をみかどといふ
當時さかんよもゆるを法性崎なり

第二段の係結

羽色の時ふよりて變ることをぞ知り侍る。

いかでか牛の終日ありかむよ及ぶべき
第三段の係結

あすこをを峯ふのぼらめ
江戸を今し東京とこそいへ

文章中係辭をのみわきて、結辭を省きたる所あり、即
筆よも繪よもえつくしかたうなむ。

笑ふ人も多かりきとぞ。

初のはなむの下よありけるといふ結辭を、次のなむの下よ
いふの結辭を省きたるなり。又係辭の重りしを、一つの結辭
よて、ごぢめたるもあり。それらを本文の標目よよりて、生徒
ふ志らしめてよ。

文法摘要終

版權所有

編纂者

逸見仲三郎

東京市麴町區中六番町
二十九番地

發行兼印刷者

吉川半七

東京市京橋區南傳馬町
壹丁目十二番地

(初) 卷	明治廿六年	四月	七月	八日	一日	印刷出版
(壹) 卷	明治廿五年	四月	九月	廿四日	三版印刷出版	
(貳) 卷上	明治廿五年	十二月	廿七日	一日	印刷出版	
(貳) 卷下	明治廿五年	十二月	廿四日	二版印刷出版		
(三) 卷上	明治廿六年	十二月	廿六日	一日	印刷出版	
(三) 卷下	明治廿六年	十二月	廿三日	二版印刷出版		
(四) 卷上	明治廿六年	三月	廿三日	一日	印刷出版	
(四) 卷下	明治廿六年	三月	廿三日	二版印刷出版		
(五) 卷上	明治廿六年	三月	廿三日	一日	印刷出版	
(五) 卷下	明治廿六年	三月	廿三日	二版印刷出版		

中學讀本 首卷 全一册 定價金貳拾五錢
初卷 定價金貳拾錢

一の卷より 壹册定價金貳拾五錢
四の卷上下各 定價金貳拾錢
五の卷上下各 定價金四拾錢
四の卷上下合本定價金四拾錢
五の卷上下合本定價金參拾五錢

漢 中學讀本 全六册

壹册定價金貳拾錢

漢 中學讀本參考書 全壹册

定價金參拾錢

